

令和6年度 第2回生活支援・介護予防体制整備推進協議会 議事録

日 時 令和7年2月3日（月）10:00～11:50

場 所 刈谷市役所 101会議室

出席者：

区 分	所 属	名 前
生活支援コーディネーター (SC)	刈谷富士松地域包括支援センター	生島謙一郎
	刈谷雁が音地域包括支援センター	宇佐美めぐみ
	刈谷中部地域包括支援センター	倉川叔子
	刈谷中央地域包括支援センター	都築琢也
	刈谷依佐美地域包括支援センター	後藤雅浩
	刈谷朝日地域包括支援センター	清水玲
各種団体を代表する者 (民間企業・NPO法人・ 協同組合・ボランティア)	株式会社ジェイテクト	杉山倫行
	刈谷市療法士連絡会	岩丸陽彦
	かりや愛知中央生活協同組合	林孝志
	刈谷市民ボランティア活動センター	米田正寛
	一般社団法人 まちづくり支援センター	塚本裕章
民生委員	刈谷市民生委員	深谷由美子
社会福祉協議会の職員 (社会福祉法人)	刈谷市社会福祉協議会	梅本秀之
その他市長が認める者	愛知教育大学	村山心春
アドバイザー	障害者福祉施設サンサン大府	塚本鋭裕

1 議 題

(1) 令和6年度第1回協議会の振り返り

(2) 高齢者の状況 (資料1の議題2を説明)

発言委員等	意見
会長	・ 事業所の求人、募集状況はどうか。
委員	・ デイサービスと居宅を事業所として運営しているが、人材不足は深刻な問題である。人員配置が満たないと介護保険上、運営ができない。2年前に人員不足で2か月間、事業所を閉鎖した。1年以上募集をかけている職種において全く採用できていなかった。最近では、単発求人アプリを取り入れているが、介護の仕事は専門性も問われるため、一日の業務を細かく切り出し、スポットで単発求人アプリを活用することを検討している。そこから徐々に業務を拡大していこうと考えている。 ・ 働き方が多様になる昨今では、そういった雇用も一つの形ではないか。
会長	・ 巷では、その場その場で誰でもできることから短時間の仕事をして、信頼関係が築けたら正社員に移行するという流れが多い印象。 ・ 高齢者の状況について感じることはどうか。
委員	・ 年々、弱ってきている方が増加し、できていたことができなくなっている。地域の中で助けていかないとどうしようもない。高齢者の支え手がもう少し増えるといい。
アドバイザー	・ 資料2の高齢者の状況にあるように、要介護認定率、介護保険料の高さが9市の中で2番目の高さ、また、2000年から2020年の20年間で、高齢者

発言委員等	意見
	夫婦世帯が 2.8 倍、高齢者単身世帯が 3.9 倍になっているというデータは全国と比べても高い。人口は都市部に集中するため、地方におけるサービスを必要とする高齢者は急激に増加していく。国のデータ上では、愛知県は 2040 年をピークとして、高齢者はまだ増加していく。 ・ 要支援者の介護度が重くならないための取組として、介護予防・生活支援を地域の方々と作り上げることが重要になっている。 ・ 他市と比べても要介護等認定率や要介護者数・要支援者数の増加率が緩やかになることが一つの指標になるだろう。

(3) 他市の総合事業の取り組み(資料1の議題3を説明)

発言委員等	意見
委員	・ 現在も、事業として生活機能が低下した方へ筋力トレーニングをして元の生活に戻すという形で介護予防が行われている。しかし、元の生活自体が「体力の落ちる生活」であるため、サービスを利用して生活機能が回復したとしても、また同じことを繰り返してしまう。そのため、体力が元に戻る生活をどのように組み立てるか、利用者本人が自身で体力の落ちない生活を考えるにはどうすればいいのかというのが、課題になっている。他市のこういった好事例の取組は検討すべきである。
会長	・ 個人で面談能力に差が出てしまうことが考えられるが、それに対してはどのような対応が考えられるか。
委員	・ 刈谷市では生活機能向上訪問事業というものがある。その事業でも質をどう担保するのが課題となっている。その解決策として、研修等で技術を学んでいる人から研修会で共有することで質を担保している。この事業を実施するにあたって、質を担保できるような仕組みづくりが大切。また、地域のことを知っている療法士を増やしていくことが課題となっている。 ・ 長いスパンで準備をする必要がある。スポット的に1時間だけ時間を作ることも可能なので、事業の組み立てが必要。
会長	・ 実際にリハビリテーション専門職の方は不足しているような状況か。
委員	・ ゆとりがある事業所は多くはないため、事業を進めていきやすい環境づくりをする必要がある。先ほどの話にあったように、その場その場で人を雇うというやり方もあるため、事業所によってさまざまな方法が考えられる。
委員	・ 本人だけでなく家族等の関係者も意識を変える必要がある。やれなくなってきたから、手伝ってもらおうという発想や、サービスを充足させようという意識では現状は変わっていかない。本人にはやれることがあるということを見つけて伝えていくことが大切。マネジメントする側もサービスを調整することが大切と考えている人もいるが、そうではないということをもう一度考える必要がある。
委員	・ 70 代、80 代でも動ける方はいる。事業対象者になって、よくなったという方をあまり見たことが無い気がする。健康な人をもっと長く健康にするということが大切ではないか。
会長	・ 制度上仕方がないことではあるが、事業所としては、利用者に利用してもらうことが利益になるため、本来回復することに対して利益を上げるような仕組みづくりが大切だと考える。 ・ 目的がはっきりして、何かしなければならぬという強い気持ちがあると認知症にもなりにくいのではないか。制度上の問題と関わる方の前向きな

発言委員等	意見
	意識も重要だと考える。
アドバイザー	- 映像にあったように、硬いかぼちゃが切れないという課題に対して、予防的な観点で支援をしてもらった時に、自分である程度何とかしようという意識がないとヘルプサービスを入れたとしても、今までできていたことも併せてお願いしてしまいがちになり、依存的な方向へ流れてしまう。そういう意味で、「意識付け」や「自己肯定感の向上」を促す取組が重要である。 - やっていることの変化を関係者で共有しながら、今後についてリハビリテーション専門職や本人も含めて考えることが、本人の自立にもつながると考える。 - 自立支援型地域ケア個別会議、介護予防訪問介護、食生活での栄養指導などのサービスは、一見関係ないように見えて、専門職が入るという意味では同じものだといえる。それを今一度評価をしたり、本人への意識付けをしたりすることで、要支援の入り口に差し掛かった人たちを連携しながら押さえることができる。それが重要だと考える。

(4) ちょこっとささえあい事業の進捗（資料1の議題4を参照）

発言委員等	意見
委員	- 利用者さんがやれないこと・やってほしいことをすべて丸投げする場合も多い。それらをすべて受けてしまっているのかの判断基準が問題になっている。初回訪問時の聞き取りを重点的に行っており、家族関係・病歴などどんな生活をされているのかできるだけ細かく聞き取り、希望を決めていく。その中で一番大事にしているのは、今までできていたけどできなくなったことを手伝い、元の生活に戻れるように支援することである。 - その例として、認定を持っていない88歳のお元気な方の例を紹介させていただきます。今まで一人で掃除をやっていたけど、つらくなってきたので、頼みたいと言われた。その際に、少しのお手伝いを詳細に説明した。それでも利用したいとのことだったので、お一人でやれないところのみの手伝いから始めた。ちょこっとの制度として、30分から利用可能だが、最大で1時間の実施なので、量が多い場合は2人体制にする。本人は邪魔になるからと抜けようとしたが、本人が可能な範囲で掃除を行ってもらったところ、サポーターと一緒に和気あいあいとやることができた。この例にもあるように、利用者にあった誘導をすることが必要になってくる。 - 電話で依頼があったときに、聞き取り調査の段階でその回はゴミの依頼だったが、他のサービス内容もあると紹介する。 - 毎回情報共有して、事例ごとに検討・確認する。サポーターは60代、70代が多い。150名くらいの登録があるが、まだまだサポーターの特性などを把握しきれていないので、把握に努める必要があると感じている。 - ヘルパーだと顔や得意なことがわかっているので楽だが、利用者とサポーターの面識がないところからスタートする。サポーターと利用者と相性が合うか判断するのが難しい。せっかく登録していただいたが、お願いができていないサポーターもいる。意気込んで登録していただいたけど、マッチングしない状況が続くのも好ましくない。なるべく依頼を頼んだ人や頼めてない人、頼んだけどマッチングしない人などを区分けして、把握したい。

発言委員等	意見
会長	・ 大学生がサポーターになる可能性があるか。
委員	・ 平日だと難しい。市外から通学する学生も多いため、授業のない土曜日に刈谷市内に来るのは難しい。朝の依頼があるのであれば、授業前に行くことは可能かもしれない。
会長	・ 案件のエリアや時間帯を把握できるとより精密なマッチングが可能ではないか。情報的に公開できるものがあれば公開してもいいのではないか。
会長	・ 協議事項に移る。
事務局	・ 協議事項として、サポーターの発掘・獲得に向けて、センターは市民、企業、団体、学校等にどのように関わるとよいと考えるか。 一ツ木町では、130名中、約30名がサポーターになっている。一ツ木地区において、3回講座を行い各40名ほどの参加があった。他地域も地区長の方に説明をして、チラシを市民だよりに入れて配っていただいている。一ツ木町では、自主的に回覧板を回したりHPを作成したり、広報活動の支援を行っていただき、それがサポーターの獲得につながっている。その事例のように、地区の拡大をしていくにあたって、チラシと回覧板でサポーターの拡大を考えている。現在、サポーターが主に高齢者ということもあって、高齢者が集まる団体の活動前に伺って、説明の機会を設けることを考えている。
委員	・ 地域の困りごとについて、ある企業から聞かれた。 ・ 工場周りの地域の方に社会貢献をしたい。もうやられているとは思いますが、さらに地域の民間企業にも説明するといいのでは。50代になって、地域の活動に関わると、退職後の人生にもいい影響があると思う。50代の人たちに発信・声掛けをしていくといい。企業に、行政や議員からでも情報を流していけるといい。働いている人はボランティアをやりたいと思っても、糸口が見つからないので、そこを後押しするといいのではないか。
委員	・ トヨタグループも社会貢献というテーマで様々な団体が立ち上がっている。例えば、洲原公園の草刈りや障がい者の方と一緒にいるオーケストライベントのスタッフ、子ども食堂など、様々な活動がある。 ・ 部署に伝えてそこからトヨタグループに展開することは可能。ただ、かなりの規模でやるとなると受ける側のキャパシティもあるので、そこは市側との調整が必要。 ・ 今まで協議を聞いての所感としては、介護予防・生活支援体制整備の活動には2つの柱があると感じた。一つはちょこっとささえあい事業のようなサポート。もう一つは自立的な観点での支援。企業の活動によって豊かになった生活が、介護予防・生活支援体制整備の視点においては、逆に妨げになっていると感じる。本当に体が動かない方へのサポートは必要な一方で、それに甘えてしまうというのは課題ではないか。 ・ 趣味に結び付けられるように、アナウンスしていくと介護予防につながる可能性があると思う。趣味がないと、家から出なくなってしまうので、地元とのつながりで役割をもって活動をすることが大切だと感じる。
事務局	・ 役割という話があったが、役割を持つことで予防の面でどの程度の効果があるのか。
委員	・ 家でも地域でも役割をもって生活している人は介護予防につながるという研究結果が出ている。役割自体は何でもよく、地域の役員といった役割でなくても、家で新聞を取りに行く役割や洗濯を取り入れる役割でも、何か

発言委員等	意見
	しら自分だけに任されているものがあると効果があるという結果が出ている。
事務局	・ 豊田系のグループで、地域貢献活動について話し合いをする場があるか。
委員	・ イベントがあるとグループ内で声掛けがあったり、情報共有している。
事務局	・ 民間企業で働かれている方がサポートする側になる際、今の活動時間など障壁になる部分はあるか。
委員	・ まず、周知することが大切。キャッチした人が自分のやりやすいようにすると思う。そうすれば、そういう活動が好きな人は、休みを取ってでもボランティアに行く人もいると考える。この時間だからやりにくいではなく、その時間にあった人が集まる形になるのではないか。
事務局	・ 目標とする人数は 1,000 人。それに向けて、周知はすでにしているので、さらに広めるためにはどうするべきか。
委員	・ 会社に遠方から出勤している人もいるので、周知してもターゲット層に限られる可能性がある。ただ、通勤途中で何かに参加するといったことも考えられるため、出方をみるためにもまずは周知してそこから傾向と課題を見つけるべきではないか。
会長	・ こういった事業はセンターの皆さんのフォローが重要だと考える。具体的にどのようなことに気を付けているか。
委員	・ サポーターとのやり取りはほぼ LINE で行っている。お手伝い終了後も LINE で報告してもらってはいるが、内容が気になるため、その後については共有している。新規のサポーターには同行をしており、気になったサポーターさんや利用者さんには少し気をかけ、声掛けをすることを意識している。 ・ サポーターへは LINE で、利用者には電話で前日に連絡している。今はまだやれているが、全地区でやるときにどこまでフォローできるかが心配。
委員	・ ちょこっとささえあい事業が始まったことで、職員一人ひとりの意識が変わった。対象地域であれば、まずはちょこっとを案内する。案内する職員の意識も重要だと考える。社会福祉協議会内でも、周知し、職員向けに説明会を設ける。
委員	・ ヘルパーを利用していた方が、ちょこっとささえあいの利用に移行する事例もある ・ 両方紹介するが、ちょこっとでいいと選択する人もいる。市民だよりしか回らない地域など事情も様々なので、周知のサポートをしていく必要があると考える。

発言委員等	意見
アドバイザー	・ ちょこっとささえあい事業の利用者は 80 代が多い。リエイブルメント事業の対象者も 80 代が多いので重なる。事業を使うことで、依存的にならずに予防・自立につながるといい。サポーターが増えていく際に、ボランティア精神が強いと逆効果になるので、意識付けに注意する必要がある。 ・ 事業を受けるということは、閉鎖的に地域とのつながりが無くなっていく中で、地域包括支援センターに相談が入る前段階で、自らが地域のサービスを使っていき、地域とのつながりを緩やかに持っていくということを意識してもらうことが重要。昨今増加している孤独死は避けられないが、少しでも早く地域で把握していくことが大事。そのためには地域と高齢者が少しでも早くつながっておくことが大切で、受援力ともいうが、そのきっかけになるサービスだと感じる。 ・ また、サポーターの発掘が大切である。企業や商店、学校への PR をどのようにやっていくかが重要。具体的な活動例を示すと自分もできるのではないかと感じると思うので、それがサポーター獲得につながる。

(4) その他

発言委員等	意見
事務局	【報告】 ・ 次年度開催日時について 第 1 回 令和 7 年 7 月 1 1 日（金）3 階防災会議室 1 0 時～ 第 2 回 令和 7 年 2 月 9 日（月） 1 0 1 会議室 1 0 時～ ・ 会長の辞任について